

三陸沿岸の港の盛衰—災害と漁業の歴史—

The rise and fall of Sanriku coastal fishing ports —History of fishing and disaster

川島秀一(東北大学 災害科学国際研究所)

Shuichi Kawashima(Tohoku University International Institute of Disaster Science)

kawashima@irides.tohoku.ac.jp

はじめに

本稿においては、三陸沿岸を対象に、近世から現代へかけ、漁場開拓を旨として船で到来した南方からの漁師たちによって、いかに三陸の漁業が開発され、人口が増大し、また、なぜその後、盛衰を繰り返していかざるを得なかったかを、多角的な資料を用いて考察するものである。また、近代以降に「津波常習地」と呼ばれた三陸沿岸において、津波による人口減少をどのような方法によって回避しようとしたか、とくに漁業との関わりのなかで捉え直してみることも課題としたい。なかでも、「海の出稼ぎ」を対象にすることで、三陸沿岸に特有な流動的な社会を捉えることを主眼とする。

海の「出稼ぎ」

明治 29 年(1896)の三陸津波の後に三陸沿岸の状況と、津波前の日常的な生活も記録してあるいた山奈宗真(1847-1909)は、その「岩手懸沿岸大海嘯取調書」に、岩手県陸前高田市の「小友村」の「出稼ぎ」について、次のように触れている。

「六、被害町村漁民年々北海道及其他出稼ノ状況

○本村 北海道 出稼 稀ナリ 無キト 云カ如シ 春 牡鹿郡四十人位

秋 釜石地方 宮古地方へ 廿人 鮪建網へ 出稼クナリ」

同じく「陸前国氣仙郡赤崎村」(現大船渡市赤崎町)の同じ項目にも、「○春ハ 石巻地方へ五十人 秋ハ 釜石地方へ三十人 鮪網 出稼スル ○氣仙郡全部五百人位 年々 稼アリト云」と記されている。

ここに記されている「鮪建網」や「鮪網」とは、「大謀網」とか「大網」と呼ばれている定置網のことで、牡鹿郡や石巻地方は「夏網」、宮古・釜石地方は「秋網」が中心であった。

つまり、この「出稼ぎ」は、高度成長期に東北地方で多く見られた、冬季の副業といえるものではなく、むしろ生業の中心となる出稼ぎであった。山奈の報告には、「氣仙郡」(現在の大船渡市・陸前高田市・住田町)全体で 500 人は「出稼」をしていたと記録されているが、これらの者は「大網人」や「広田ポー」(広田半島の出身者)と呼ばれ、村々を離れ、積極的に三陸沿岸の南北を往来していた。そして、この「出稼ぎ」は魚種や漁法を問わず、三陸沿岸の特徴の一つでもあった。

たとえば、宮城県の気仙沼地方では、カツオー一本釣り漁の「出稼ぎ」が衰えた後、高度成長期には、マグロの遠洋延縄漁船に乗り組み、年間 10 カ月以上も、インド洋やオーストラリア南方、大西洋までの、世界の 7 つの海で操業するという、遠洋漁業の漁師が増大した。1970 代になると、帰郷した者は次々と気仙大工の伝統を継ぐ宮作りの「唐桑御殿」

と称される家を競って建て替えている。

この状況をも広い意味で「出稼ぎ」と捉えたとすると、高度成長期における都市へ向けての冬季の「出稼ぎ」と同一のものと捉えることが困難になってくる。三陸沿岸の生活は、以上のような多様な漁業と人間の大きな移動があり、決して「里海」と呼ばれるような漁村のイメージだけでは捉えきれぬものではなかった。

津波の後の「家の復興」

明治三陸津波の後の山奈宗真のように、昭和8年(1933)の三陸津波の後に、つぶさに被災地をあるいて記録を続けたのは、民俗学者の山口弥一郎(1902-2000)であった。著書の『津浪と村』のなかで山口は、災害後の惨状、哀話を語るものはあるが、復興については語られず、特に家の再興について語られることは皆無であるという状況を述べ、「全滅した家はどのように復興するのか」という問いを投げかけている。

山口が真っ先に事例として挙げた、岩手県上閉伊郡鵜住居村の両石(現釜石市)という集落は、明治29年の津波により、総人口958人のうち824人が死亡、負傷者は126人、無傷の者は8人しかいなかった。実に人口の86%に当たる人々が一瞬のうちに波に呑まれたのである。また、総戸数144戸のうち141戸が流出し、1戸が半壊、無事だったのはたった2戸のみであった。144戸のうち、全家族死亡した家は61戸に及び、そのうち16戸は廃絶、45戸は相続人を見出し、再興を果たした。山口はこの再興の仕方に目を凝らしたのである。

最も簡単な家系再興の事例は、絶家に対する生き残った親戚の血縁者や、本家や分家の子孫たちが肩代わりをする方法である。つまり、津波後に生き残った家の者が、この機会に次三男を廃絶の危機に陥っている家に入れ、分家を増やす傾向が目立っている。縁故がない絶家に対しては、区長や役場などによる働きと斡旋により、他家の者が戸籍を変更したり、新しい位牌をつくって、その家を保持することになった。

また、両石と関わりのないよそ者によって家を継いだ事例もある。「両石は他所者の集まり」と言われていたが、実際には縁故のない者が家を継ぐことは少ない。しかし、成年になって両石に来た入婿の者が多く目立ったために、これが「他所者の集まり」と言われる原因となっていた。

移入者の経路として顕著なのは、宮城県十三浜村(現石巻市北上町)より来た者たちであり、当時、両石村には、十三浜村よりイカ釣漁師が多く滞在していた。そのときの付き合いにより、入婿する者が多かったという。たとえば、ある女子は津波により家族を失い、東京の孤児院にて20才まで過ごし、その後、両石に戻り、十三浜より婿を取り、家を継ぐことになったというような事例もある。

イカ釣漁師を入婿にすることで、両石の集落を回復させるとともに、イカ釣りという漁業技術も後世に伝承させることになったわけである。

この十三浜の漁師は、前述したような意味では、海の「出稼ぎ」漁師であった。つまり、三陸沿岸の特質ともいえる「出稼ぎ」という外部の力を借りて、復興を成し遂げていったのである。

また、両石の隣村である桑ノ浜(現釜石市)では、婿に行った先で被災して妻子を亡くした者が、絶家した生家に戻って家を継いだ例もあった。逆に嫁に行った先で夫を亡くし、実家も絶家したために、戻って家を興した例もある。山口は、桑ノ浜でこのような事例に

注目したわけであるが、この浜でも、総じて津波で残された女性と移動性に富む漁師が結びついて家を継ぐ例が多かった。

岩手県船越村田ノ浜(現山田町)も、明治 29 年の津波で 300 戸のうち 60 戸が被害を受けた集落である。この集落で山口が注目したのは、本家分家関係によって、家が再興されていく事例である。本家分家関係であっても名字が異なるのは、船頭と水主という漁労の関係から本家分家関係に移行したためであり、船越で「名子かこ」と呼ばれている。その「名子かこ」の家が津波後に途絶えようとするところに、本家から入って家を継ぐ場合がある。たとえば、本家の 6 才の少年を宛がい、25 年後には名実ともに「名子かこ」の家を継いでいる。「名子かこ」の家のことを「名子かまど」ともいうが、逆に名子かまどの家(分家)から、絶家した本家を継がせる場合もあった。

ただし、家系の継承が直ちに実際の屋敷の復興になるわけではない。一家全滅後、周囲の人々によって家を再興しても、継承した人が他所へ転出する場合もあるからである。ただ、できるだけ集落内の家の廃絶を少なくして、養子養女の成長とともに漸次復興していくことを望んだわけである。

両石や田ノ浜のように被害の大きな地域では、近距離からの移入者だけで復興するのに不十分であったために、遠距離からの移入者が顕著に見られると考えられる。

流動的な社会における「家の復興」

つまり、「家の復興」の仕方においても、地域社会に蓄積された知識や慣行がその役割を果たしたのである。「家の復興」について、山口が対象としていなかった宮城県の気仙沼地方においても、家を継続するために、大災害のときにかぎらず、日常的にもさまざまな慣行があった。たとえば、「寄せ家督」とは、子孫がいない家が養子や養女をとって家を継がせることを指している。「姉家督」とは、長子の女性が家を継ぐこと、「付け別家」とは、本家分家関係も血縁もない家が旧家などに願い出て、分家にしてもらうことをいう。村の本家分家関係に組み入れられることで、家の安寧をはかったわけである。気仙沼地方も、移入者は裸一貫から努力し、次第に村のなかで有力な者になっていくことが目立つ社会であり、婿が出世する社会とも言われていた。

三陸沿岸のように質的に流動的な社会であったがために、明治 29 年、昭和 8 年、昭和 35 年(1960)のチリ地震津波と、近代以降にも何度も大津波に遭っていながらも、家も集落も復興することができた原因を再認識しなければならないものと思われる。

おわりに

以上のように、近代から現代までの三陸沿岸の漁港の、限られた断面を扱いながら、その盛衰の実態を述べてきたが、三陸沿岸は、船の移動により、ヒトや文化が移動し、津波災害の後には復興にも影響を与え、定着していくような、すこぶる流動的な社会であったと理解される。以上のような「移動の文化」により「集住」自体を相対化すること、あるいは「集住」のなかに「移動文化」を組み込んで捉えることは、三陸沿岸にかぎらず、列島の歴史の様相を展開する上で、必要な作業になると思われる。